
 □ 特 集 □

心因をめぐる諸問題

第3回日本精神病理・精神療学会シンポジウム

司 会 日本大学教授 井村 恒郎

副司会 九州大学講師 西園 昌久

□ は じ め に □

ご承知のように心因という概念はごくふつうに使われておりますけれども、その意味はかなりあいまいであります。私どもが精神科の1年生になったころ、心因といいますといわゆる心因反応を考えまして、ごく一過性の異常状態、それも異常な境遇、あるいは不なれな境遇におかれたときに現われる一過性の現象、その個人の人格とは本質的にあまり関係のない、その個人はもともと正常者であるというような前提が暗々裡のうちにありまして、なにか異常体験に即して現われる直接的な反応というふうに考えておりました。

具体的にいいますと“昏迷状態”になるとか、あるいは“もうろう状態”になるとか、あるいは急激な“不安・驚愕反応”を呈するとかいうことを考えておりましたが、こんにちでは心因の概念はもつと広くなりまして、もつと長期間に現われる異常な状態をもたらす場合、たとえば異常人格の形成にかかわる心因をも含めています。そして

必ずしも可逆的ではない異常状態たとえば非常に sensitive な人柄ができるとか、あるいはまた neurotic な性格がつくられるというような心理的な発達 (Entwicklung) にあずかる心因という概念も加わっております。これに関連して第3に、従来は非常に簡単にこの刺激反応図式で考えましたところの心因反応も、実はその個人がそうなるべくしてなつたような準備状態があつたのではないか、いわゆる準備因子ですが、そういう準備因子そのものは、前述の人格ないし性格の一面であつて、これも環境的な要因によつてつくられていくのではないかという考えかたに結びつきます。このように心因の諸概念は複雑にもつれあつてはつきりしないのが現状です。ここには幾多の問題が残っております。Bleuler などそういう事態を現わすような適切な概念ないし名称がないというようなことを教科書にも書いておりますが、われわれもその点について同感でございます。

きょうお話いただく4人のかたは、それぞれ独自の研究領域をもつておられまして、その長年にわたる研究成果の上に立つて、おそらく適切な心因の概念をわれわれに与えてくれることと期待しております。

(井村恒郎)

*1966 年 10 月 14 日於福岡市明治生命館ホール